GENERAL INCORPORATED FOUNDATION BACH GROVE

バッハの森通信

第 164 号
2024年
8月29日発行

一般財団法人バッハの森
〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 http://www.bach.or.jp
☎ 029-847-8696／Fax 029-847-8699 e-mail：info@bach.or.jp
郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

アーレントさんを偲ぶ

探し求めた響き

7月末に「夏のワークショップ＆音楽会」終了直後に、バッハの森・記念奏楽堂のオルガンを建造したユルゲン・アーレントさんの訃報を聞きました。そして、私が思い出したのは、今から約50年前に始まった、バッハの森建設計画の中心となるオルガンの建造を託す人を探す一子の後をついて、ヨーロッパ、アメリカを訪ね歩いた日々でした。

＊　＊　＊

前後しますが、ここで、故・一子とバッハの森建設計画について一言説明いたします。1976年に、創立間もない筑波大学に奉職した私は、オルガニストの妻・一子と共に、建設途上のつくばに移住してきました。その前、私たちはエルサレムに住み、私はヘブライ大学で学び、一子はエルサレムのドイツ教会のオルガニストをしていました。

歴史的に、アンティ・セミティズムの迫害を受けてきたユダヤ人は、絶対にキリスト教会に来ません。しかし、渋るドイツ人の牧師を説得して、一子がオルガン・コンサートを開いたところ、会堂はユダヤ人の聴衆で満員になりました。このように、敵対する人々を結びつける音楽の力を目の当たりにしたことが、バッハの森建設計画の一つのきっかけになったと思います。

一子は教会オルガニストとして育った人ですが、一般日本人が教会を敬遠していることを残念に思っていました。そこで、教会とは別に、一般日本人が偉大な文化遺産である教会音楽を楽しむ場所があってもいいのではないか、と考えるようになったのです。これがバッハの森建設のもう一つの理念です。

＊　＊　＊

1982年の夏休みに、私たちは、カリフォルニアのバークリーに滞在していましたが、そこのチャペルでアーレント・オルガンを弾いたとき、一子は、尋ね求めていた響きに出会いました。早速、翌年、私たちは北ドイツのツェレでオルガン建設中のアーレントさんを訪ね、オルガンの建造を依頼しました。最初、土地も設計図も未定、教会でも学校でもない、夢みたいな話のバッハの森の依頼に応えようとされませんでしたが、私たちが熱心にバッハの森の理念を説明し、最後に彼女が、バークリーのアーレント・オルガンのようなオルガンでバッハのコラール編曲を弾きたいのだ、と明白な目的を語ると、バッハの森に相応しいオルガンを建造しようと約束してくださいました。

その後、手紙の交換によって具体的なオルガンの仕様などがまとまり、1984年にバッハの森とアーレント工房の間で正式の契約が結ばれました。同時にこの年、バッハの森は建物の建設工事に着工し、年末までに完成すると、1985年正月に開館して活動を始めました。

その後、聖グレゴリオの家のオルガンの建造のため来日したアーレントさんは、帰途、バッハの森に寄ってくださいました。先ず奏楽堂を一目見て大いに気にいり、その音響に感心し、正面中央にオルガンを設置して欲しいと告げると大変喜んで、後方のギャラリーに立ってスケッチを始めました。後にこのスケッチ通りにオルガンはたちました。

1989年5月に解体されたオルガンが到着、3人の技師たちが1週間で組み立て終わると、アーレントさん夫妻が2週間かけて調音し、6月4日に「アーレント・オルガン建造記念の集い」が開かれました。

契約したオルガンは18列音栓でしたが、建造されたオルガンには19列の音栓がついていました。するとアーレントさんは、バッハのコラール編曲を演奏するためには、もう1列欲しいと思ったのでつけたが、これは私の贈り物ですよ、と言いました。同時にアーレントさんが紹介してくださった青年オルガニスト、ヤン・エルンストさんは、さらに大きな贈り物でした。これからもアーレント・オルガンがバッハの森記念奏楽堂で響き続けることを切に願っております。（石田友雄）

Denn seine güte weret ewiglich.

バッハの風に招かれて

バッハの森・初体験記

第9回 朝のオルガン音楽鑑賞会 2024年6月21日

バッハの森に到着するまで

皆さん、初めまして。南原彩稀子(ﾅﾝﾊﾞﾗ・ｻｷｺ)と申します。6月21日、22日に「バッハの風に招かれて」初めてバッハの森へ伺いました。

先ず、今回バッハの森へ伺った経緯を自己紹介とともに記します。愛知県豊田市北部で生まれ、その地で60数年生活しております。東に紅葉の景勝地、香嵐渓、市内中心部にはトヨタ自動車本社があり、農耕社会と自動車産業が混在している都市です。

還暦目前に良い熟成をしたいと考え、オルガンを弾き始めました。子供時代に弾いたピアノの鍵盤に40年ぶりに触れてみて、ヘ音記号の読み方を思い出すことから始めなければなりませんでした。オルガンを弾くのには、手鍵盤とともに足鍵盤も踏まねばならず「大変なことを始めてしまった。大丈夫？」「やっぱり無理かな」と自問自答する日々でした。ところがそのうち1分くらいの曲が弾けるようになると、1日6時間のパート勤務でくたくたになっていた身体が楽になり、オルガンの音に心身が癒やされていくのが分かるようになりました。

幸い豊田市コンサートホールには、ジョン・ブランボー氏建造のパイプオルガンがあり、毎年オルガン体験会として市民にも弾かせてくれる機会があります。この体験会を2回経てから「豊田オルガン研究会」に入会しました。研究会の会員は約50名で、毎年コンサートホールで発表会を開いています。

ところが豊田市コンサートホールが耐震工事のため、2025年4月から2026年5月末まで休館となるので「豊田オルガン研究会」の活動も休止となり、どうしたものかと思案していたところ、オルガンの先生から「バッハの森に行ってみてはどうですか」とアドヴァイスをいただきました。「バッハの森は誰でも歓迎してくれるし、宮本とも子先生の演奏やレッスンは勉強になり、石田友雄先生の聖書講義は面白くてためになる」と、初心者だからと尻込みする私の背中を押してくださいました。

こうして6月21日早朝、大雨の三河を出発して東に向かい、迷わず到着できたバッハの森では、柔和なお顔で石田友雄先生が迎えてくださいました。

パイプオルガンと聖書

朝のオルガン音楽鑑賞会は大盛況でした。初めに宮本とも子先生がバッハの「フーガ・ト短調」（BWV 578）を演奏してくださいました。ストップの切り替えでいろいろな音色を弾き分け、初級者の私にも息を継ぐような音と音の間が分かりました。これまで聴いてきたバッハはリード管を多用してややドラスティックな音でしたが、こんなにも穏やかで優しい響きでいいのだということが分かりました。

続いて石田友雄先生の「キリエ、永遠にいます父なる神よ」の解説があり、全員でそのコラールを斉唱した後、そのコラール編曲（BWV 669）を宮本先生が演奏してくださいました。常々オルガンの先生から「オルガン・コラールは、元来歌詞につけられた旋律をオルガン曲に編曲したものだから、歌詞を念頭に演奏しなさい」「弾けない部分は歌ってみなさい」とご指導を受けていたので、石田先生の文字言語と、オルガンに合わせて音声言語として発声してみることで、この指導の真意が分かりました。

中世に確立した能も、仏典や和歌集の文言を詞章としています。演劇として楽しむだけではなく、笛、鼓などの楽器を伴わない「素謡(ｽｳﾀｲ)」として音声言語として旋律を楽しむ享受法も発達しました。洋の東西を問わず、文字言語から音声言語へ、またその逆へと旋律が媒体となり体得する過程を、バッハの森で具現していることを知りました。

クラヴィコードとユルゲン・アーレント氏建造のパイプオルガンに触れる機会もいただきました。どちらも鍵盤が軽く、豊田市コンサートホールの重い鍵盤に慣れている私には、どう弾いよいか分からず悩みました。強く押せば大きな音が鳴るものではなく、よく音を聴いて鍵盤を押す離すをしないと乱暴な響きになってしまいます。オルガンは千差万別、難しい楽器です。

聖書は難しい、日本語に翻訳されているが、意味が分からない、と聖書に苦手意識が先行していましたが、石田先生の聖書講座は語学的説明と歴史書として聖書を読む魅力的な時間でした。例えば、三位一体の神を日本語で「父・子・聖霊」と表しますが、原語ギリシャ語や各国語の翻訳でこの「子」は「息子」であって、「子供」ではないと説明されました。

バッハの森の訪問は、コラールのオルガン編曲を弾くことは、単に楽譜のとおり手鍵盤と足鍵盤で音を出すだけではなく、聖書に基づく歌詞を学び、考えることと深く関連していること

が腑に落ちた二日間でした。オルガンを演奏するとは、聖書を読み、自分の声で音を発し、手足でパイプに風を送り、楽譜の音符を言葉のように響かせることだと悟り、私もオルガンにバッハの風を送れるように、と祈念しながら帰途につきました。（南原彩稀子）

夏のワークショップ & 音楽会 2024

2024年7月27日～28日

ワークショップ指導
合唱指導:ヤン・エルンスト
ヴォイス・トレーニング:マインデルト・ツヴァルト
音楽会出演
ソプラノ:鈴木美紀子
カウンターテナー:マインデルト・ツヴァルト
バス:中川郁太朗
ヴァイオリン:桐山建志
オーボエ・ダモーレ:尾崎温子
オルガン:鈴木由帆、ヤン・エルンスト
合唱:夏のワークショップ参加者
朗読:石田友雄
指揮者:ヤン・エルンスト

音　楽　会
第I部「主の憐れみ」
オルガン:J. パッヘルベル
「いと高きところにいます神にのみ栄光があるように」
朗　読:詩篇23篇「主は私の羊飼い」
合　唱:G. P. ダ・パレストリーナ
「キリエ」、「グローリア」《ミサ・ブレヴィス》より
朗　読:ヨハネによる福音書10章11～16節
「私は善い羊飼である」
会衆斉唱:「主はわが飼い主」
朗　読:メディタツィオ(石田友雄)

復活祭から聖霊降臨祭の7週間、50日かけて、ナザレのイエスの弟子たちは、イエスは誰であったかを尋ね求め、彼がキリスト、すなち、メシアであるという確信に到達したと新約聖書は伝えます。それを、いろいろな形で、復活したイエスに「出会った」と神秘的な表現で語りますが、その意味することは、彼らが目覚めて伝道活動を始めた結果、彼らの信仰が後にキリスト教と呼ばれる国際的宗教にまで展開した歴史的事実から理解できるはずだと考えます。そこで、このような立場から、ワークショップで学ぶカンタータ"Der Herr ist mein getreuer Hirt"（BWV 112）が意味することを調べてみましょう。

先ず復活祭後第2の日曜日に教会暦が与える「主の憐れみ」、"Misericordias Domoni"と言う名称に注目します。次に、詩篇23篇「主は私の羊飼い」“Der Herr ist mein Hirte”をパラフレーズしたドイツ語訳のコラールに基づき、"Misericordias Domoni"の礼拝のためにバッハが作曲したカンタータを理解するために、この日の福音書、「私は善い羊飼いである。彼は羊のために命を捨てる」（ヨハネによる福音書10章11節以下）を読みます。6節からなる詩篇23篇の1～4節を、カンタータは1～3曲にまとめ、詩篇の5～6節を4、5曲とします。そこで、詩篇1～4節＝カンタータ1～3曲を前半、5～6節＝4、5曲を後半として話をすすめます。前半が牧者と羊の比喩によって「主」、すなわちキリストと信徒の関係を語っていることは明らかです。しかもカンタータはしばしば比喩の枠を超えて、「美味しい牧草」とは「救いの御言葉」、「生き返らせる水」とは「聖なる霊」であると説明し、「暗い谷間を彷徨っていても恐れない、主が常にともにいて慰めてくださるから」と、キリストがともにいてくださるので、この世を歩み続けることができると、牧者と羊の比喩に基づく信徒の告白を導き出します。さらに福音書は、羊のために命を捨てる羊飼いについて語り、イエスが善い羊飼いであることを証言します。

後半は、牧者と羊の比喩から離れて、実際に敵に攻められる苦境に陥ったときも、与えられる守りと祝福を「善きものと憐れみが、生涯、私を追いかけ」と詠い、詩篇ではエルサレム神殿、コラールとカンタータではキリスト者の群れ、すなわち教会に留まると、信仰告白をします。「憐れみ」と訳したドイツ語"Barmherzigkeit"は「慈しみ」とも訳され、ラテン語は"Misericordia"です。こうして牧者と羊の比喩に始まるカンタータの総括が「主の憐れみ」であることが明らかになったと思います。

合　唱　J. S. バッハ《カンタータ》「主は私の誠実な羊飼」(BWV 112)

第II部「音楽の贈り物」
合　奏:G. F. ヘンデル「オーボエとオルガンのためのソナタヘ長調」(HWV 363a)
1. アダジオ　2. アレグロ
アリア:G. F. ヘンデル「彼は羊飼いのように その群れを飼い」《メサイア》より
合　奏:G. F. ヘンデル「オーボエとオルガンのためのソナタヘ長調」
3. アダジオ　4. イギリス風ブーレ　5. メヌエット
コラール:「愛する神にのみ寄り頼む者を」
合　奏:J. S. バッハ　コラール編曲

「オーボエとオルガン」(BWV 690b)
オルガン:J. S. バッハ「3曲のコラール編曲」
(BWV 690a, 691, 642)
会衆斉唱:「愛する神にのみ寄り頼む者を」
オルガン:J. C. キッテル「3曲のコラール編曲」
オルガン:J. S. バッハ「オルガンのための
コンチェルト ト長調」(BWV 592)
アリア:J. S. バッハ「まどろめ、疲れた眼(マナコ)よ」
《カンタータ「我は満ち足れり」(BWV 82)》より

充実した学びのとき

「ドイツのカントール、ヤン・エルンスト氏とカウンターテナー、マインデルト・ツヴァルト氏の指導のもと、J. S. バッハのカンタータ「主は私の誠実な羊飼」(BWV 112) 全曲演奏を目指します」という、きわめて魅力的でチャレンジングな企画にお誘いいただいたのは5月のことでした。楽しみにしながらも、恥ずかしながら、ほとんど事前の予習や知識、気構えもないままに当日がやってきました。例年にない酷暑の中、東京から車を走らせ、到着したバッハの森は、建物の前の田んぼの緑が目に眩しく、静かな空気が漂っていて、すぐに特別な2日間を予感させました。

2日間といっても、土曜日の午後と日曜日の午前の2枠で合唱を仕上げ、そのまますぐに音楽会本番、というスケジュールです。アマチュア合唱団でバッハを歌ってはいても、経験も浅く、1年以上かけて本番を迎えるのが常の私にとって、2日で歌えるようになるのは、参加するまで、じつは、とても難しいことに思えました。ところが終わってみれば、本当にわずか2日だったのかと、今も不思議な感覚を覚えるほど、夢のように素晴らしく充実した経験となりました。このワークショップに参加する前と後では、もう同じ自分ではない、という気がするほどです。

ワークショップは、まず歌手のツヴァルトさんによる丁寧なヴォイストレーニングから始まりました。足の開き方、立ち方、姿勢の保ち方を十分に整えた上での発声練習。とくに有声子音と無声子音を交互に、しっかり区別して発声するエクササイズは、ドイツ語歌詞の子音を明瞭に発音することの大切さを、改めて認識させられるものでした。

続いていよいよ、エルンストさんによる合唱指導です。ドイツ北東部、シュヴェリンの大聖堂に奉職するカントールであり、ハンブルク大学教授でもあるエルンストさんは、歌手として活躍するツヴァルトさんとともに、バッハの森の旧くからの友人であり、今回はコロナ禍を挟んで6年ぶりの来日。せっかくお二人が来られるならワークショップを、と今回の企画がなされたと伺いました。

バッハのカンタータを歌うことは、私にとっては永年の夢でした。それが、思いがけず、ドイツの教会やコンサートで日常的に指揮し、歌っておられるお二人に、このように近しく教えていただける機会を得られたということに、深い感動を覚えつつ歌いました。エルンストさんの的確な指導、指示でどんどん音楽がまとまっていき、「互いに聴き合って一つの声のように」という言葉に、参加者の合唱が応えていくのを実感しました。限られた時間の中でも、たくさん歌えた充実感がありました。

合唱には、ツヴァルトさんもアルト・パートに入って一緒に歌ってくださり、とても心強いことでした。さらに幸運なことに、私は常にお隣に座ることになり、ツヴァルトさんのドイツ語をお手本として聴きながら、多くを学ばせていただきました。

今回の合唱課題曲は、カンタータ「主は私の誠実な羊飼い」"Herr ist mein getreuer Hirt" (BWV 112)の冒頭の合唱と結びのコラール、加えてパレストリーナの《ミサ・ブレヴィス》から「キリエ」と「グローリア」でした。オルガンの鈴木由帆さん、ヴァイオリンの桐山健志さん、オーボエ・ダモーレの尾崎温子さんが、練習段階から何度も一緒に演奏してくださるという贅沢な時間でした。ちなみに、暑さゆえに、オルガンのピッチが最高でA=447Hzまで上がるような状況でしたが、桐山さんと尾崎さんが、まるでなんでもないことのように見事に合わせてくださり、さすがはプロフェッショナルだと感服しました。

本番では、カウンターテナーのツヴァルトさんに加え、ソプラノの鈴木美紀子さん、バスの中川郁太朗さんがカンタータのソロ・アリア、レチタティーヴォ、デュエットを歌ってくださり、（もちろん合唱にも加わってくださり）、カンタータを通して歌う、という目標は美しく完成されました。

さて、この「本番」のプログラム構成は、私の想像をはるかに超える重厚なものでした。

第I部「主の憐れみ」は、パッヘルベルのコラール前奏曲「いと高きところにいます神にのみ栄光があるように」のオルガン独奏で始まり、詩篇23篇の朗読、パレストリーナの「キリエ」「グローリア」の合唱、ヨハネによる福音書10章11節～16節の朗読、コラール「主はわが

飼い主」の会衆斉唱。そして石田友雄先生によるメディタツィオで、カンタータと第I部を貫くテーマである「主は我が飼い主」について詳しい解説がなされました。復活祭後第2日曜「主の憐れみ」（Misericordias Domini）のためバッハが作曲したカンタータの構成と歌詞をつぶさに見れば、牧者と羊の比喩に始まるこのカタータ（BWV 112）の総括が、まさしく「主の憐れみ」であることがわかるというものです。こうして一同が深い理解を共有したうえで、カンタータ「主は私の誠実な羊飼い」(BWV 112）が演奏されました。

短い休憩の後、第II部「音楽の贈り物」では、プロフェッショナルの先生方による見事な演奏が華々しく展開されました。第I部では指揮をされたエルンストさんが、今度は素晴らしいオルガン演奏を聴かせてくださいました。まず、ヘンデルのオーボエとオルガンのためのソナタ・ヘ長調が、間に「メサイア」よりソプラノとアルトのアリア「彼は羊飼いのようにその群れを飼い」を挿入する形で演奏されました。そのあとは、「愛する神にのみより頼む者を」（Wer nur den lieben Gott läßt walten）をテーマに、オーボエとオルガン、またオルガン独奏によるコラール編曲が演奏され、会衆斉唱で全員が声を合わせた後、オルガン独奏でキッテル作曲のコラール編曲3曲。続いて、バッハのオルガンのためのコンチェルト・ト長調、最後はバッハのカンタータ「我は満ちたれり」（BWV 82）よりアリア「まどろめ疲れた眼よ」をツヴァルトさんが歌ってくださいました。最後に「今日は奇しくもバッハの命日。そのような日にバッハを演奏できてよかったですね」というエルンストさんの一言に一同、なんとも幸せな気持ちになりました。

音楽会が終わり、名残惜しくも解散となりました。遠くは福岡や新潟などなど、各地から参加された方々と、「またバッハの森で会いましょう」と挨拶を交わし、2日間でこれだけのことができた、学べた、という充足感に満たされて、帰路につきました。

思い返すも、石田友雄先生とバッハの森の皆様の、音楽への愛と温かいお心が、あらゆる場面で感じられるワークショップでした。奏楽堂には紫陽花や庭の緑が涼しげに活けられていて心癒やされました。また休憩時間のために用意された様々な飲み物やお菓子にはとても安らいだ気持ちにさせていただきました。企画からチラシ、プログラムの制作、細やかなご案内のメールなど、事前の準備から当日の運営まで、バッハの森に連なる方々のきめ細やかなお心遣いが、この2日間を奇跡的なものにしてくださっていたのだと思います。

また個人的な話ではありますが、今回のワークショップに参加できたのは、宮本とも子先生との数十年ぶりの再会がきっかけでした。私は若いころ、オルガンやクラヴィコードを学んでおり、先生には大変お世話になっていました。その後、仕事の忙しさなどから、長いあいだ音楽を勉強する場から遠ざかっていたのですが、「いつかまた音楽と向き合いたい」という願いを実現すべき時が来たと感じ、近頃は勉強会などに顔を出すようになりました。そして今年5月の連休中、バッハの森をお借りして行われた合唱・管楽器・鍵盤楽器の（福島康晴氏、宮下宣子氏、栗形亜樹子氏による）合同合宿、コラボ・セミナーに参加したところ、宮本先生が聴きにいらしてくださり、胸躍る邂逅を果たしたのです。そして夏のワークショップにお導きいただき、「音楽を再び」「いつかバッハのカンタータを」という私の願いが、望外の素晴らしい形で叶えられましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。（津屋式子）

音楽を通じて
皆が一つの流れとなりました

音楽はそれぞれ音色の異なる様、「皦如」(ｷｮｳｼﾞｮ)として独自の音色を保ち、一如(ｲﾁﾆｮ)として一つの音の流れに没入します。2600年前、琴の名人でもあった孔子が、魯の司空の地位にあったときの言葉です。

今回のワークショップでは、合唱への参加を通じて、バッハの森に集まった、指揮者ヤン・エルンストさんをはじめとするすべての演奏者、聴きにこられた方々、演奏会の準備をしてくださった方々と一体になれる素晴らしい体験ができました。

ソプラノ、アルト、テナー、バスなど、様々な声部とともに、オルガン、ヴァイオリン、オーボエなど様々な楽器が組み合わされ、一つの音楽を形成していました。これを実際の演奏として一つの流れにするためには何が必要だったのでしょうか？まず、演奏する曲について共通の理解と認識を持つこと、次に演奏する様式について共通の理解を持つことではないでしょうか。

今回のワークショップの中心は、J. S. バッハのカンタータ「主は私の誠実な羊飼い」"Der

Herr ist mein getreuer Hirt″（BWV 112）でした。これを、バッハの森ならではの解釈を石田友雄先生が次のように説明なさいました。

カンタータのもとになった「ダビデの歌」と表詞がつく詩篇23篇は、牧者と羊の比喩から始まり、ダビデが直面したあらゆる脅威や困難、または彼を迫害する者たちや霊的な悪や罪を敵と象徴的に語り、ダビデは神の守りと導きを信じ、神が彼の前に食卓を整えてくださると言います。さらに敵に囲まれても神の「憐れみ／慈しみ」が与えられ、安全が確保されるという信仰を示します。この主の「憐れみ／慈しみ」をラテン語で″Misericordia″と言い、ルターは″Barmherzigkeit″と訳しました。この「主の憐れみ／慈しみ」が、このカンタータの総括であると石田先生は解説し、私たちは共通の認識のもと、音楽に入り込みました。

さらに、音楽会では「憐れみ／慈しみ」の表現を新約聖書のギリシャ語にまでさかのぼります。すなわち、パレストリーナの「ミサ・ブレヴィス」の第一曲「キリエ」です。″Kyrie eleison, Christe eleison, Kyrie eleison″「主よ、憐れみたまえ。キリストよ、憐れみたまえ。主よ、憐れみたまえ」は新約聖書から発しているギリシャ語の言葉そのままです。「エレイソン」は神々や権力者に対する単なる感情表現にとどまらず、実際の救済を期待する慈悲として理解されていたと言います。つまり、情け深さを求めるという点で、「憐れみ」と「慈悲」が一体となった概念であり、分かちがたいものだったのです。

「キリエ」に続く「グローリア」はラテン語の典礼詞で、その終わりのほうで「我らを憐れみたまえ」″miserere nobis″と歌います。このあたりまで歌うとエルンストさんの指揮による音楽もぐっと和声感が増してきました。これだけの準備をしたうえで、カンータの合唱に入りました。そしてカンタータの終曲コラールは、「善きものと憐れみが生涯私を追いかける」″Gutes und die Barmherzigkeit folgen mir nach im Leben″と歌います。

今回のバッハの森のワークショップで、1世紀に書かれた新約聖書から16世紀のパレストリーナの「ミサ・ブレヴィス」の「キリエ」と「グローリア」、18世紀のJ. S. バッハのカンタータを経て21世紀に繋がる音楽として、バッハの森ならではの深い教会音楽の理解を基に歌えたことは、至福のひとときでした。

合唱に参加された方々は、日本各地から集まりました。私とバス・パートを歌っていた方は九州から来られていました。皆、それぞれ異なる立場で育ち、生活してきて、異なる音楽環境で音楽を楽しんできました。これらの異なる音色が一体となる音楽の流れ作り、一体となる大きな愛が生まれてくるのは、「神の人間に対する大きな深い同情心、憐れみから」であることを、石田友雄先生の準備と解説から味わうことができました。

罪ゆえに滅んでいく人間がそのまま滅んでほしくない。何としても地獄の苦しみから助けだしたいという熱い思いが籠められたバッハの森、石田友雄先生のパッションに感謝いたします。（及川正尋）

信頼と友情の果実

変わるものと変わらないもの

初夏のシーズン開始早々の4月、ドイツからヤン・エルンストさんとマインデルト・ツヴァルトさんが、6年ぶりに来日するという知らせが飛び込んできました。彼らは、バッハの森と長きにわたる友情を積み重ねてきた特別な音楽家です。1996年から2007年まで毎年、春のゴールデンウィークに来日し、4日間のワークショップ・フェスティヴァルで、演奏と音楽指導をしてくださいました。彼ら二人と共に学び、歌う毎年のワークショップで学んだことは、現在でもバッハの森の音楽的な支えの一部になっていると感じます。

7月末にヤンとマインデルトが来るというニュースを聞いて、バッハの森の皆は勿論喜びましたが、同時に、最近、バッハの森の会員数が大分減少しているので、果たしてどのようなワークショップが開けるか、その企画と運営を誰がするのかという危惧の声が上がりました。

そのような中、すべてに前向きの石田友雄先生が、先ず最初は数人のメンバーと個別に語り合い、準備を始めました。幸い早速、バッハの森のオルガニストの宮本とも子さんが、1日半のワークショップと音楽会の素案を提出してくださいました。それは、バッハのカンタータ1曲の全曲演奏を目指して、声楽と器楽のソリストを迎え、クワイアは合唱練習をするワークショップを開くという案でした。この提案をめぐり、より具体的に、諸問題について話し合った結果、合唱参加者20名、聴講者30名を目標に参加者を募集するチラシを作りました。それはワークショップの予定期日まで約1ヶ月余りしかない時で、果たして何人応募者がいるか不安

でしたが、最終的に合唱に約20名の参加者が集まりました。

広報と参加申し込みの受付係りには、別所直樹さんと私、徐淑子があたることになりました。また別所さんは会計も担当してくださいました。合唱参加者約20名の内訳は、半数がバッハの森の会員、或いは元会員、半数が今回のワークショップで初めてバッハの森にいらした方々でした。このうちバッハの森クワイヤ・メンバーは、ワークショップが始まる前の4週間、週1回集まって、課題曲の自主練習をしました。ワークショップの期間中、ヤンはバッハの森のメンバーが合唱全体の中核的な役割を果たしていると、以前から知り合っていた人たちに話していました。このことは、ヤンとバッハの森クワイアの間に音楽的信頼関係があったことを示していると、嬉しく受け止めました。

演奏会では、マインデルトの他５人の器楽・声楽演奏家がゲスト・ソリストとして参加してくださいました。これらの方々は、ゲネプロの時だけではなく、合唱のメンバーとして、或いは伴奏者として、ワークショップに参加してくださいました。

今回、運営にあたり人手不足を補うために、申し込み方法や名簿の管理などに、新しい方法を取り入れました。これまでのやり方を出来る限りインターネット環境に移して場所と時間の制約を節約しました。しかし、特にワークショップと音楽会の当日は、バッハの森会員皆さんの手をおおいにお借りしました。そして皆さんが喜んで手を貸してくださいました。つまり変化したことはあっても、すべてが、それまでの積み重ねの上にあるということです。

ワークショップの初日は午後3時に集合し、ヤンによる短時間の合唱指導で、バッハのカンタータ「主は私の誠実な羊飼い」（BWV 112）の第1曲と終曲、それにパレストリーナのミサ・ブレヴィスより「キリエ」と「グローリア」の形をつくり、2日目午前には仕上げと声楽、器楽のソリストたちが入ったリハーサル、間を空けずに同日午後に開かれる演奏会の第1部で練習成果を発表しました。今回、合唱で学んだ曲目は、比較的歌いやすい曲ではあるものの、一晩置かずして仕上げるようなスピード感に、ちょっとしたスリルを感じました。

演奏会第2部は、ゲスト演奏家の演奏がメインとなり、クワイアはゆったりと聴き手に回り、聴衆と共にコラールの会衆斉唱に加わりました。ヤンが構成したというプログラムは、演奏会第1部から第2部に向かう「羊飼いと羊」をモチーフにした楽曲とそれらが表現する情景、第2部後半に向かって「羊の群れ」から一人の人間の内面へ視点が転換していく深み、さらに、神への信頼のもとこの世に別れを告げるBWV82のアリアと、それぞれのパートがつながり合って全体を奏でる心の旅のようでした。

バッハの森にヤン・エルンストさんを紹介したのは、バッハの森のオルガンを建造した故ユルゲン・アーレント氏だと伺っています。石田友雄・一子先生とバッハの森が、これらの方と育んできた友情と信頼の輪に、今回新たに参加してくださった方々が加わり、音楽の分かち合いができたことに、深い感謝を覚えます。

（徐淑子）

ヤン・エルンストさんから

2024年8月6日

友雄さん、バッハの森の皆さん／またまた皆さんとご一緒できたのは、私たちにとって本当にとても嬉しいことでした。皆さんのおもてなしに深く感謝し、そもそも35年におよぶご友情に深く感謝します。皆さんのところで数十年にわたって私たちが経験したことすべてから、私たちの生き方と音楽は影響を受けてきました。私たちは心からそう思っています。

それに今度は７月末に美しいバッハのカンタータと素晴らしいオルガン演奏が加わりました。このすぐ後でユルゲン・アーレントさんが亡くなったことを知り、あのコンサートは別の意味で特別なものになりました。

私たちは下田で素敵な一週間海辺で過ごしました。金曜日には館山でチャリティー・コンサートを開きます。

もう一度すべてに感謝いたします。そして皆さんが、喜びをもって更に活動をお続けになることを祈ります。お元気で。

心よりのご挨拶とともに

ヤンとマインデルト

（原文はドイツ語、石田友雄訳）

日　誌（2024. 4. 1～7. 31）

4. 27　訪問　今井奈緒子氏、岩崎真実子氏、峰本さやか氏（日本オルガン研究会）
6. 1　訪問　植木麻実氏（どろんこ保育園）
6. 9　対談　大村幸弘氏、吉田大輔氏、吉田知子氏、早川伸一氏（中近東文化センター付属博物館）
6. 21　朝のオルガン音楽鑑賞会　参加者27名。
7. 9～11　植栽整理　鈴木造園。
7. 11　査察　つくば消防署
7. 21　訪問　オルランディ・リカルド氏・彩貴氏、子どもたち3人。
7. 26　リハーサル　ヤン・エルンスト氏、マインデルト・ツヴァルト氏。
7. 27・28　夏のワークショップ　＆　音楽会　参加者7. 27：27名、7. 28：35名。
7. 28　取材　川上真生氏、松尾有姫氏（筑波大学新聞）

コラール・カンタータ入門
カンタータ：
J. S. バッハ「主は私の誠実な羊飼い」（BWV 112）
J. S. バッハ「泣き、嘆き、憂い、怯え」（BWV 12）
J. S. バッハ「キリストの昇天のみを」（BWV 128）
コラール：
W. モイスリン「主はわが飼い主」
S. ローディガスト「御神の御業は」
W. ヴェーゲリン「天(ｱﾒ)に昇りたる」
M. アヴェナリウス「おぉイェス、われの」
オルガニスト
4. 13　安西文子。　参加者12名。
4. 20　笠間きよ子。参加者4名。
4. 27　笠間きよ子。参加者11名。
5. 11　安西文子。　参加者7名。
5. 18　安西文子。　参加者12名。
5. 25　安西文子。　参加者8名。
6. 1　安西文子。　参加者9名。
6. 8　金谷尚美。　参加者7名。
6. 15　金谷尚美。　参加者8名。
6. 22　金谷尚美。　参加者11名。

学習コース
バッハの森クワイア　4. 13／8名、4. 20／10名、4. 27／9名、5. 11／7名、5. 18／9名、5. 25／8名、6. 1／8名、6. 8／6名、6. 15／7名、6. 22／8 名、6. 29／5 名。
オルガン音楽研究会　4. 12／8名、4. 20／8名、5. 10／7名、5. 24／8名、6. 7／９名。

オルガン・クラブ　4. 12／4名、5. 17／4名、5. 31／2名、6. 14／2名。

歴史書・聖書入門　4. 13／6名、4. 20／4名、4. 27／7名、5. 11／5名、5. 18／7名、5. 25／6名、6. 1／6名、6. 8／2名 、6. 15／7名、6. 22／5名。
ハンドベル・クワイア　4. 13／7名、5. 11／5名、5. 25／7名、6. 15／6名。
ハンドベル・リンガーズ　4. 28／9名、5. 19／9名、6. 16／10名、7. 7／10名、。
クラヴィコード・レッスン　4. 12／2名。
オルガン・レッスン　6. 21／2名。
チェンバロ・レッスン　4. 26／8名、6. 7／5名、7. 12／3名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
4. 2／2名、4. 4／2名、4. 5／1名、4. 11／2名、4. 12／3名、4. 13／2名、4. 16／1名、4. 18／2名、4. 19／4名、4. 20／1名、4. 25／5名、4. 26／4名、4. 27／2名、5. 9／2名、5. 10／2名、5. 11／1名、5. 16／3名、5. 17／4名、5. 18／1名、5. 22／1名、5. 23／3名、5. 24／1名、5. 25／2名、5. 30／2名、5. 31／3名、6. 1／2名、6. 5／1名、6. 6／2名、6. 7／6名、6. 8／3名、6. 12／1名、6. 19／1名、6. 20／1名、6. 21／4名、6. 22／2名、6. 27／1名、6. 29／1名、7. 4／1名、7. 5／1名、7. 11／3名、7. 12／3名、7. 17／1名、7. 18／1名、7. 19／1名、7. 24／ 1名、7. 26／2名、7. 27／2名、7. 28／2名。

地上権更新の報告
今年、2024年1月に、奏楽堂を含むコミュニティーセンター（100坪）の地上権更新、3月に貸家（80坪）の地上権更新を前回と同様の条件で契約を結び、特別会計への寄付金により158万4千円を支払い、20年間の地上権を確保しました。ご報告と共に深く感謝申し上げます。
（会計担当）